

滝口明祥著 『太宰治ブームの系譜』

廖，韋娜

九州大学大学院地球社会統合科学府：修士課程一年

<https://doi.org/10.15017/1903749>

出版情報：九大日文. 29, pp.113-116, 2017-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



滝口明祥著 『太宰治ブームの系譜』

廖 韋 娜

目次

はじめに

第一部 〈太宰治〉と戦後の十五年

第一章 第一次太宰ブーム——一九四八年

第二章 戦後の編集者たち

第三章 戦後の若者たち

第四章 第二次太宰ブーム——一九五五年

第二部 『太宰治全集』の成立

第一章 八雲書店版『太宰治全集』

第二章 筑摩書房版『太宰治全集』

第三章 検閲と本文

第三部 高度経済成長のなかで

第一章 〈太宰治〉と読者たち

第二章 第三次太宰ブーム——一九六七年前後

第三章 「からっぽ」な心をかかえて

終章 その後の〈太宰治〉

本書は出版側の視点から出発し、入水自殺による第一次ブームから現在まで、〈太宰治〉という作家の受容の有り様及び変遷を時代の流れに沿いながら考察している。滝口氏によると、著書の発行部数からすれば、生前の太宰治は本当の意味で人気作家であったとは言いがたいという。それは現在の太宰治という作家イメージとは大きく異なっていると言える。彼は如何に人気作家になったのか。そこには作品の優劣以外に要因があるのではないだろうか。目次に示されているように、滝口氏は歴史的な視座をもち、〈太宰治〉という作家イメージの形成過程及び各時代の受容状況を追跡している。ここで構想されているのは、太宰治個人の受容史であると同時に、戦後日本の経済発展や政治状況が絡んだ文学史でもある。

第一部は入水自殺の一九四八年と筑摩書房版の『太宰治全集』第一巻の刊行の一九五五年という二つの時点に巻き起こった太宰ブームを対象として、〈太宰治〉が人気作家として定着していく経緯や要因を検討している。一九四八年、戦争未亡人の山崎富栄との入水自殺という事件をきっかけに、当時のエリートを中心とする少数の愛読者しか持たなかった太宰治は、その名が急速に全国に知られるようになった。尤も、知名度が大きく高まったとはいえ、実際はそのスキャンダラスな事件、及び太宰の死因だけに興味を持っていた人が多勢であったと指摘されている。しかし、スキャンダルへの社会的な関心は一時的なものであり次第に薄くなっていく。没後の太宰が人気作家へと登りつめていく過程には、太宰及び太宰文学と深く関わって

いた戦後の編集者たちの果たした役割が大きかった。彼らの多くは戦時中からの太宰作品の愛読者であった。中でも、筑摩書房社主である古田晃の存在によってこそ、一九五五年の筑摩書房版『太宰治全集』の誕生があつたことを滝口氏は明らかにしている。それを端緒として、スキヤンダラスな話題から離れた第二次太宰ブームも始まった。終戦の頃に、表面的には太宰に反発しつつも言及を繰り返した三島由紀夫や、本格的な太宰研究を開いたといえる奥野健男ら、さらに「第三の新人」に代表される「戦中派」など、当時の二十代の若者たちが、太宰及び太宰文学への注目を大きく呼び起こした存在である。滝口氏は中でも、一番の戦争犠牲者と呼ばれる「戦中派」に代表される若者たちを取り上げ、その無気力やニヒリスティックな姿勢が、太宰文学における虚無やデカダンスに生きている青年の姿と共通していると述べている。第二次の太宰ブームは実にそうした戦中派を中核として展開したと指摘されている。

第二部は第一部とほぼ同じ時期を扱っているが、主に〈太宰治全集〉を中心に展開されている。一九四八年に八雲書店から刊行された『太宰治全集』の中絶や、創藝社から刊行された近代文庫版の『太宰治全集』の不完全さをへて、一九五五年に本格的な『太宰治全集』が筑摩書房によって刊行開始され、さらに第十一次まで続いていった。それぞれの底本が異なり、どの版本が作者の真意を表しているのかという問題が指摘されている。これについて、第三章では、太宰文学と検閲との関係が詳しく論じられている。一般的には、検閲を被る前の本文、

つまり改稿される前の本文が「正しい」とされている。それ故に、作者の「真の姿」を現すために、筑摩書房版の『太宰治全集』はその「正しい」本文を採用した。しかし、滝口氏はその「正しさ」に疑問を呈する。戦時下にいる作者は自分の作品を流通させるため、意識的に、あるいは無意識的に検閲に配慮しながら創作を続けていたからである。しかし一方でそのことが、太宰文学の原稿と改稿をめぐる研究に多彩な可能性をもたらしてきたという側面もあると考えられる。

続いて、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、本格的な高度経済成長期に入ると同時に、第一次ベビー・ブームや急速な都市化、マスプロ教育などの社会状況も現れてきた。その背景において、太宰(文学)が教科書や卒論に登場し、太宰研究をめぐる批評の視点も作家の思想から作品の文体へと転換した。一九六〇年代後半の第三次太宰ブームに、太宰に関する演劇が公開され、山崎富栄のイメージが変化し、「無頼派」も再評価されることになった。さらに、全共闘運動下における太宰の若い愛読者たち、当時、文壇の中心となっていた「第三の新人」との比較、読書感想文における太宰治など、様々な面で太宰にまつわる新たな動向が生じ、再び太宰ファンが大量に出現してくるようになったことが第三部に詳しく論じられている。

終章は第三次太宰ブームから現在にかけての〈太宰治〉を取り上げている。一九七〇年代以来、各出版社の文庫への参入、個人全集における「作者」という概念の稀薄化など、出版業界及び読者層の新たな傾向が出てきた。一九九八年の第十一次ま

でに続いた筑摩書房版の『太宰治全集』の刊行や、文庫版やアンソロジー版という新たな読書形態の浸透を背景に、〈太宰治〉の読者層もまた拡大されていく。そしてサブカルチャー・ポストモダンなどが注目されるようになる八〇年代以降、〈太宰治〉という作家のイメージも「滑稽」や「かるみ」、或いはポストモダンの作家として捉え直されるようになっていく。特にゼロ年代以降、映画や漫画、アニメ、ケータイ小説などの多様なメディア形式と繋がって現われ、〈太宰治〉はまた多彩な側面を見せている。

以上の滝口氏の論説から、太宰治は如何に人気作家へと辿り着いていくかということの経緯が明らかにされていると同時に、その作家イメージが大きく変わってきたことも伺える。特にゼロ年代に入ってから、二〇〇七年、集英社文庫版『人間失格』のカバーを『デスノート』で知られる漫画家・小畑健によるイラストに替えたことを端緒に、様々な表紙の付された『人間失格』及びそれに伴って現れてくる名作の『ジャケ買い』、ケータイ小説や漫画としての再版、同名映画の全国公開など、太宰治という作家はとりわけ『人間失格』に拘わって再登場してくるといえる。さらに、太宰自身も漫画のキャラクターとして登場した。ライトノベルや漫画が文化において担うところの大きい現代において、時代を問わない普遍的な作品性のみならず、作家の人物像が再評価の対象となったのである。生前から一九七〇年代にかけて、エリートである旧制高校の学生を中心とした文学青年たちという最初の〈太宰〉ファンから、感想文

で太宰作品を取り上げる学生たちに至り、多彩な形で話題となった〈太宰〉は段々と人気作家の座へと辿り着いていく。しかし歴史の影を帯びながらも変わることがないのは、やはりその読者層が若者たちを中心としているという点であろう。一番の戦争犠牲者であれ、「からっぽ」の〈現代的不幸者〉であれ、太宰文学における登場人物のイメージには、共通して汎時代的な無力感や弱さ、空虚感がつきまとっている。そういった登場人物への共感や、或いは太宰という作家自身の〈誠実〉や〈純粹〉さが、若い読者を引きつけ続けているといえよう。しかし一方、第三次太宰ブーム以来、ポストモダン作家から、「戦時下のライトノベルズ作家」(大塚英志『更新期の文学』、春秋社、平十七)を経て、今や〈イケメン〉(萌え)キャラクターとしての〈文豪〉へ、と太宰治の作家イメージも時代に応じて大きく変わってきたといえる。漫画家・古屋兎丸による『人間失格』や青い文学シリーズによるテレビアニメ『人間失格』、漫画『文豪ストレイドッグス』に登場する『太宰治』などのように、地域振興の切り札となっている事例が本書でも紹介されているが、小説作品が漫画化やアニメ化され、作家がキャラクター化されるなど、〈太宰治〉が〈現役作家〉であると同時に、商品としての性格を持つていることは特に注目されてよい。ハイカルチャーからサブカルチャーへの流れの中で、また「作者」という概念が段々と稀薄化していく時代において、〈太宰治〉のイメージは既にただの〈作家〉とは言えないであろう。滝口氏の論説は主に高度経済成長期までを取り上げているが、終章で

紹介されるにとどまっているゼロ年代以降のサブカルチャーの文脈における現在進行形の受容動向が、今後〈太宰治 像研究〉の新たな課題となると思われる。そして、様々な媒体で多様に展開される〈太宰〉の姿を拾い上げていくにあたっては、太宰作品の中でも漫画や映画での登場頻度が飛び抜けて高い小説『人間失格』にかかわる動向が、特に重要な切り口となるであろう。

本書は太宰治にまつわる作家論や作品論から飛び出し、歴

史的な地平を導入することにより、経済や政治の発展、文壇の動向、メディア言説、国語教育など、全社会の状況を統括する歴史的な各情報を盛んに絡みこませながら、各時代における太宰治の作家イメージ及びその形成原因を浮き彫りにしている。太宰研究にとって非常に有益な研究書である。

（二〇一六年六月 ひつじ書房 三三七頁 三四〇〇円＋税）

（九州大学大学院地球社会統合科学府修士課程一年）